

ダンパーフレークの導入(8)
—マルチアンプシステム—

1. 始めに

インフラノイズ社から、ターンテーブルアキュライザーTACU-1が発売され、その感想文を送るとダンパーフレークなる返礼品が送られてきました。前報(7)に引き続き、このものの応用を検討していきます。

2. ダンパーフレークの試聴方法

今回は、JBL4350AのマルチアンプシステムのチャンネルデバイダーF-15のレベル調整つまみに適用してみたいと思います。

JBL4350Aの最新の状態はJBL4350Aの再構成(4)で報告しています。また、チャンネルデバイダーF-15のレベル調整つまみには、ヴォリュームアキュライザーの模造品(5)で報告したフェルトを貼っています。



このフェルトを取り除いてダンパーフレークを貼ってみます。



なお、再生システムのLINN LP-12には、ダンパーフレークの導入(2)とダンパーフレークの導入(3)で報告した箇所にダンパーフレークを貼っています。

試聴する音源はJBL4350Aの再構成(4)で使用した下記とします。

Deutsche Grammophon 483-6927/6928/6929

J.S.Bach Sonatas & Partitas

Nathan Milstein

ドイツグラモフォン MG9551

ベートーヴェン 三つのピアノソナタ (選帝侯のソナタ)
ゲザ・アンダ (ピアノ)

LONDON KLJC-9180/9184 (RTI/キングレコード)

リヒャルト・ワーグナー ワルキューレ全曲
ゲオルグ・ショルティ指揮ウイーンフィル

Angel (東芝 EMI) AA 9117・C

ゲオルグ・フドリッヒ・ヘンデル
オットー・クレンペラー指揮フィルハーモニア

キングレコード SKA-104

愛と自然の歌
倍賞千恵子

3. ダンパーフレークの試聴結果

先にチャンネルデバイダーF-15のレベル調整つまみにフェルトを貼った状態で聴いておき、次にダンパーフレークを貼って聴いていきます。

フェルトを貼った状態でも、ダブルウーファー駆動アンプの入れ替え、TACU-1の導入に加えて、ダンパーフレークの導入(2)とダンパーフレークの導入(3)で報告した3箇所にはダンパーフレークを貼っていますので、それらの効果で、JBLの抜けと切れの良さは残しつつ、解像度も上がり、ホーンのきつさも緩和されています。

BachのSonatas & Partitasは、フェルトを貼った状態でもヴァイオリンのきつさはなくボウイングの様も十分に把握できます。ダンパーフレークに貼り替えますと、弦の柔らかいニュアンスが向上しますが、フェルトを貼った状態のスリリングなボウイングの音はなくなります。

選帝侯のソナタは、フェルトを貼った状態でもバランスよく、打鍵の状況が分かりやすくなっています。ダンパーフレークに貼り替えますと、優等生的な端正で響きの良いピアノですが、反面打鍵の強さの表現力は後退します。

ワルキューレは、フェルトを貼った状態でも解像度がよくバランス良く迫力十分です。ダンパーフレークに貼り替えますと、弦の柔らかさは向上しますが、金管の抜けや低域の押出は後退します。

メサイアは、フェルトを貼った状態でも合唱の分離も良く、通奏低音の音階も明瞭で、ソプラノやバスの歌唱も伸び伸びと歌詞のニュアンスを伝えてくれています。ダンパーフレークに貼り替えますと、ソフトで聴きやすい音になりますが、反面JBLらしい抜けの良さや切れ味の良さは後退します。

倍賞千恵子は、フェルトを貼った状態でも声も伸び伸びとし、ギターやマンドリンなどのバックもよく弾んでいます。ダンパーフレークに貼り替えますと、柔らかい声の歌唱は魅力的ですが、反面弾んでいたバックはもたついた感じになります。

以上のように利害得失が合い半ばしますが、JBLのシステムに期待するのは、大編成ものの迫力やJBLらしい抜けの良さや切れの良さですので、元の状態に戻すことにします。再びフェルトに貼り直して、元の音が戻ってきたことを確認できました。

4. まとめ

チャンネルデバイダーF-15のレベル調整つまみにダンパーフレークを適用した結果、予想外に効きすぎた感じで、弦のきつさなどはなくなって柔らかい響きは魅力的ですが、反面JBLらしいスリリングな切れ味や押出は後退しました。

以上